

## 陳垣による中日医学交流

郭 秀梅

順天堂大学医学部医史学研究室／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

2007年1月27日の日本医史学会例会にて、岡田靖雄先生が「自明治三十九年一月会費収納簿奨進医会」を発表され、私はその名簿に載る陳垣に目をひかれた。陳垣は中国近代の史学者・教育家として知られている。しかし彼は医学者でもあり、中日の医学と様々な関連があるが、そうした事跡はほとんど注目されていない。

陳垣(1880~1971)の字は援庵、広東新会で生まれ、1901年に科挙の秀才に及第。1907年博済医学院に入学し、1909年に中国初の私立西洋医学校一広州光華医学専門学校を創設、教員のかたわら『光華医事衛生雑誌』なども主編した。1913年に医学から史学に転じ、生涯にわたり大量の論述をなした。1915年には全国税務処に勤務、1926年輔仁大学学長を任じ、1952年に輔仁大学と北京師範大学が合併した後も学長を歴任した。

陳垣は二回訪日している。一回目は1908年の夏休み、蘇墨齋と一ヶ月にわたる訪日で、目的は中国古医書の探索だった。東京で富士川游など医学界重鎮と面会し、さらに富士川の自宅に招待され、敬慕久しい多紀元胤『(中国)医籍考』を実見している。これを借りて筆写したかったが、まもなく日本での出版との話のため待つことにした。結局、1935年やっと影印出版され、それを1936年に中国で縮印出版し、陳垣の賀詩も掲載されている。訪日後、彼は頻繁に新聞や雑誌に投稿し、江戸時代の伝統医学や医事制度、日本近代医学の進展や医師の国際的活動などを紹介している。例えば「日本徳川季世之医事教育」「日本医人之風度」など。また富士川の学問に敬意を払い、『日本医学史』を称賛した。近代日本の医学事情を詳しく中国に伝えたのは、おそらく彼が最初だろう。のち日本の中国研究に関心を示し、日本の医学テキストをモデルに広州光華医学校の教科書も編纂していた。

二回目は1917年10月29日上海から出発し、奈良・大阪・東京などを訪問。本来は税務官としての訪日だったが、かたわら学者との交流や探書もしたい。11月、日本の学会に招待されて「元也里可温考」を発表し、注目された。また大阪では『破邪集』、東京では『貞元釈教目録』を入手している。最後に助川の海水浴場を視察し、翌年1月香港に帰着、約三ヶ月にわたる日本の旅を終えた。

ところで前述「奨進医会」の会費収納簿に載る陳垣の記述は、「明治42(1909)年9月4日、一ヶ年会費壹円五十銭」で、署名は陳垣の自筆と思われる。しかし彼は生涯に二回しか来日していない。さらに1909年は8月24日に陳垣の父が亡くなり、しばらく服喪したため、訪日は考えられない。ゆえに1908年の夏休み、東京で富士川と会った時に奨進医会に入会し、会費を納めたが、何かの原因で納付年がずれたのだろう。

陳垣の優れた点は、当時の中国における中医を批判して西医を推進する風潮に対し、両医学の長所を認識して客観的に論述したことにある。しかも中医文献の保護と研究を重視し、1927年の政府への書簡で楊守敬「観海堂蔵書」の処遇を説き、故宮博物館に収蔵することが許可されている。また西洋医学の最新の発展を機敏に受け取り、中国近代医学が国際に臨むべく、国際会議への積極的参加をうながしていた。

なお中国学や文献学において、陳垣の名著『史諱举例』は必須文献とされている。しかし彼の医史学への業績は忘れられてしまった。陳垣は当初、友好的かつ謙虚な態度で日本に学ぼうとしていたが、日中戦争の勃発で日本に強く憤慨し、交流は途絶えている。にもかかわらず日本の中国研究への関心はゆるまず、角逐感情もあった。彼は中日国交正常化の前年に逝去し、三回目の訪日機会がなかったことは残念である。